

30年ほど前に、ニューヨークにトランプタワーを建設して一躍有名人となった不動産屋2代目のトランプ氏は“嘘つきで優秀な不動産屋”で、世界トップの有名人がここに入居していると嘘の名前をマスコミに発表するのは常套手段。ヤンキース松井秀喜や田中マー君なども入居者と発表されたが嘘だったようです。

昨年の大統領選のテレビ討論会では34回の嘘発言をし、相手側ヒラリー氏は4つの嘘があったと分析されています。また、「大統領選挙では500万人の外国人が不正投票した」と主張したが、証拠は何もなく、大統領就任式には、「参加者は150万人で過去最大だった」と言い張ったが、推定25万人とも報道されたことは記憶に新しいところです。

1987年刊行「トランプ自伝」のゴーストライター、シュウォルツ氏が、自責の念に駆られて、昨年7月「ニューヨーク」に暴露した内容が紹介されましたので下記の通り一部を引用します。現在の混迷する世界政局を理解する一助に、米国大統領の人間性を参考にして下さい。

記

「どんなに見え見えの嘘だろうと、一度嘘が通ると、トランプは、あらゆることを嘘で塗り固めるのです。異常なほど衝動的で自己中心的な性格」と、シュウォルツは言う。「トランプがとる態度は、『おまえはクズだ、嘘つきのクソ野郎だ』と相手を罵倒するか『おまえは最高だ』とおだてるかの2つしかありません」。

「トランプはどんな話題でも5分と集中できません。長時間集中するのは不可能な人間で、非常に危険です」。トランプの知的水準は「きわめて浅く、恐ろしいほど無知」だと思う。「トランプの情報源はテレビです。情報が理解しやすいフレーズで流れてきますから」。「トランプは成人してから、本を1冊でも最後まで読み通したことがあるか、心底疑問です」。自伝を執筆するために18カ月トランプを間近で観察していたが、トランプのデスクにもオフィスにも住居にも、1冊の本も見かけなかった。トランプは明らかに読書に関心がありません。

大衆の注目を浴びたいという欲望だけがトランプを突き動かしていた。電話を切るとき、あいさつ代わりに「おまえは最高だ！」と言う。「トランプは、注目を浴びるのがとにかく嬉しいのです」

「トランプは口を開けば嘘をつく」。「そして、自分が言ったことはすべて本当であるか、本当であるべきだと自分で信じてしまう」。「トランプの嘘は口から出まかせではなく意図的。人をだますことに何の良心の呵責も感じていないのです」。多くの人は事実と違うことであれば口に出すのをためらうものだが、トランプは事実かどうかといったことをまったく気にしない。「発言が事実と違う」と指摘されると、喧嘩腰で自分が正しいと強弁する。薄っぺらな虚栄心が危うくなると益々強引に我を通そうとする。時には『その通り嘘だ』という代わりに“誠実な誇張だ”と言う。

シュウォルツは「わたしが忌み嫌っているものをトランプは好んでいる。それは、人を押しつけることや、派手で下品な誇大妄想。彼は金では買えないものがあることは知らない。トランプにとっては金がすべてで、『おれは、おまえよりリッチだ』と言うことが何よりも大事なのです」。ただひたすら「金が欲しい、称賛されたい、有名になりたい」という尽きることのない欲望なのだ。「注目を浴びたい」という強迫観念にとらわれていて、大統領選に出馬したのもそのためだとシュウォルツは言う。「40年間、トランプはひたすらその欲望を満足させるために生きてきたのです。トランプが語ってくれた話は、自分を実際より有能に見せるためのホラ話だった」。

トランプが家族と過ごす時間はほとんどなく、親友と呼べる人間もいなかった。

トランプは「めったに父親の話はせず、自分は一人で成功したと見せようとしていた」。だが、多くの契約で父親が連帯保証人としてサインしていた。また、カジノ経営に乗り出す際にも、父親から7,500万ドルを借り、ローンが支払えなくなった際には父親がカジノのチップ約300万ドル分を買って現金化させたこともあった。「当時、トランプが所有する資産の大半はカジノだったが、すべて赤字だった」。トランプの会社は5回倒産した。「あの本を書いたのはおれだ。あなたは共同執筆者だから出版記念パーティ費用を半分負担しろ、と言われ、あきれ返ったが負担させられた。7年間で何百万ドルもの金を慈善事業に寄付すると約束していたが、調査して確認できたのは1万ドルのみであった」。

「トランプを大統領に選出したら自分たちの利益を代表してくれると信じて投票した人々は、いずれ重大な事実を知ることになるだろう。トランプにとって、自分以外の人間は居ても居なくてもよい、使い捨てのものに過ぎないのです」

(以上)